



北海道胆振東部地震と情報

朝6時頃、目が覚めるとホテルの一室がなんとなく薄暗い。そういえば夜中の3時頃ハンガーが左右に45度ほど揺れる地震があったことをなんとなく思い出した。すると部屋の電気はつかず、浴室の水も一切出てこない。あれっと思い慌ててスマホを見ると、北海道安平町、のちに厚真町で震度6強の地震（のちに震度7）があったことが速報されていた。2018年9月6日未明に起きた地震に、ある学会に出席するため滞在していた函館で私は遭遇したのだった。

ホテルのエレベータはすべて停止していた。私は8階に泊まっていたので、非常階段をホテルのロビーまで降りた。ロビーにはすでに多くの人が集まっていて、そこで私は初めて地震の大きさを実感しつつあった。後に知ったのだが函館は震度5弱だったようだ。

ホテルでは電気が使用できないのでコールドミールのみが朝食として提供されていた。朝食後に近くのコンビニに行ってみると、多くの人が並び、パンやおにぎり、水、携帯充電器、電池などはすでに売り切れ状態だった。この長い列の原因はPOSの読み取りができないため、商品ごとに店員が棚に行き値段を大声でレジに叫ぶためであった。店によってはPOS読み取り装置の充電が切れるまでは店を開くとのことであった。さらに、カード、ATMは使用不可で現金がないと買い物もできない。

北海道一帯がすべて停電、ブラックアウトという予想外のことが起きていた。苫東厚真の発電所が停止したため、ほかの発電所の負荷が増し連鎖的な破壊が生じるとのこと、すべての発電所は停止状態になった。えっ、こんな制御を行っているの。分散制御を行っていれば、ブラックアウトで何が起きたか。まず携帯電話のつながりが悪くなった。それでも6日の午前中は時々音声が届くくらいで、Web等のインターネットは、まだ、使用できた。しかし、午後になると12時

くらいから夕方18時過ぎまでは電話もWebもまったく使用できなくなり、情報が入らない状態になった。午前中の本州からの友人の連絡では電気は1週間くらい停止らしいぞとか続々と情報が入ってきていた。不思議なもので北海道以外の地域ではテレビで大地震と報道されていたらしいが、現地の私たちには情報が入らず、真相がまったく分からない状態になっていた。函館駅に行くと全列車が停止で多くの人が床に座り込んでいる。

札幌や函館では携帯が充電できる場所がいくつかの公共施設で開放されたが、この情報は皮肉にも応援するプロ野球の中継を聞くために持ち合わせたラジオからである。充電に開放された場所では、数十メートルの列ができ、充電時間が制限されたところもある。特に、旅行者は情報弱者になることを実感させられた。メールも大学のサーバが4日間停電で停止したため、まったく受け取れない状態になった。頑張っていたのはラジオ局が発信するアナログな情報である。また、固定電話の黒電話と公衆電話は使用でき、これもアナログ的である。

全道地域一帯が電力供給停止になったことで、充電できないスマホ、サーバダウンやインターネットによる情報伝達の停止、信号機や公共交通の停止、ガソリンスタンドの閉鎖、POSの停止、ATMの停止、カードの使用不可、等、私たちがいかに当たり前のインフラで情報を得て利用しているのかを痛感させられた。せめてラジオのアプリがスマホについていたら、旭川で一人暮らしをする母親は近所の人に来てくれたことが一番心強かったとのこと。人の繋がりという温かい情報を改めて知る。突然の災害に対して、特に電力停止に対してロバストな情報インフラの構築がいかに必要なことを考えさせられた。

(2018年9月28日受付)